

福澤先生塚中談

全







福澤先生浮世談は此程關西地方の某氏が先生を訪問のとき四方八  
方の談話中當日は先生閑暇の時にて凡そ半日ばかり陳べ續けられ  
たる其事柄は多くは浮世の男女交際法即ち男子の不行狀、婦人の  
無勢力よりして遂に家道を紊亂するの事實を痛論したるものにして  
て席上に矢野由次郎氏が之を速記せしゆゑ時事新報の社説として  
數日間の紙上に掲載せしに新聞紙は一讀直に散佚するの常にして  
保存に便ならず之を小冊子に纏め尙ほ廣く世間に傳へたしと望ま  
るゝ向も少なからざるに由り今回更らに出版發賣して廣く世人の  
需めに應ずるものなり

明治三十一年二月

時事新報社

# 福澤先生浮世談

福澤諭吉口述

矢野由次郎速記

維新以來世の文明が段々進歩するに連れて婦人論と云ふものがな  
 かなか喧しくなつて或は女子教育の爲めに集會を催はし或は女學校を  
 造るやうな話が世間に幾らもありますが其大本を尋ねて見れば兎に  
 角に日本婦人は智識が乏しい従て女子相當の權力がない男女同權男  
 子も婦人も共に一軒の家に居り一國の中に住居して双方相對して多  
 少の輕重もない筈なのに日本の婦人は如何にも其身相應の勢力がな  
 い家に在ても然り交際社會に出ても其通り日本の國を男子一方で持  
 ちこして歸入するしども無さば如く如何にも損ちやだから如何して

も婦人の地位をすんと進めて男女共に國を持ち家を保つと云ふも  
を遣らなければならぬ其大本は只智識にある即ち女子教育の必要な  
る所以であると斯云ふ意味であるらしい

あるらしいが扱て今の婦人が世間の論者の言ふ通りに只教育のない  
許が婦人社會に勢力のない原因であらうか此點に就ては大に疑があ  
る私の見る所では爾うでなくして本當の大原因はもつと、いうも手近  
い所に在りはしないかと思はれる、といふのは今婦人に權力がない男  
女の權力が平均しないと云ふとは是れは西洋諸國と日本とを比較  
して爾ういふのであらう爾うすれば西洋の婦人が彼れ程の勢力を持  
て居ると云ふのは教育があるからで日本の婦人には教育がないと云  
ふ許であらうが其邊は大に吟味しなければならぬ點と思はれる  
平均すれば日本の婦人は西洋の婦人に比較した所で教育は少ない、少

ないには違ひない、違ひないけれどもモウ一つ日本と西洋と比べて見  
て大に違ふ所がありはしないか、其大に違つて居る所を日本の論客が  
容易に看過して何とも氣に止めないと云ふのは如何にも分らない話、  
其大に違ふと云ふ所は何處であらうか西洋は一夫一婦の國である日  
本は一夫多妻の國である此位な大變な違ひはないぢやないか其事に  
就ては一寸とも今まで世の論客、教育者と云ふ人達が一言も論じた  
とはないぢやないか何の事だ實に馬鹿氣な話ぢや、其大本を問はずに  
只教育がない教育がないと云ふ所が詰り何の役にも立ちませぬ  
先づ日本の教育——婦人教育を遣るならば多妻法と云ふもを第一  
番に打倒して仕舞はなければならぬ其事に氣が付すに只其學校を遣  
るの集會を催はすのと云ふ所が百年經つて役に立ちさうにも爲やし  
ない抑も日本の多妻法と云ふのは是れは由來久しいものとてマア何干

年前からあつた事か知れない、所が近來の文明開化に進んだらば稍々其方にも論及してどうか工夫をする人がありさうだと思ひの外却て甚だしくなつたと云ふのは昔は多妻法で一妻一妾をみるの話でなく一妻數妾、大名など云ふものは大層な事であつた、けれどもそれは窃と靜にして置いて世間に現れるゝとが甚だ薄かつた此節は青天白日金さへあれば内儀さんは幾人でも是れは事實ではないか、ソレをあるの話しやない東京にした所で昔の江戸の時には遊女があつた吉原深川と云ふやうな所に遊女屋があつて如何しき女は居たけれども藝者——市中の藝者と云ふものは決して賣淫婦ではなかつた、酷く喧かつた所が此節の藝者と名くる輩は先づ平均して賣淫婦ならざるはなしと申して間違ひはなからう、さうすると徳川時代よりか一步も二歩も進んで此東京市中は皆吉原深川になつて仕舞た卑劣な言葉を使ふと湯屋

の歸りにも女郎買が出来るると云ふ事は今の有様、どうしたつて多妻法が盛になつたと云はなくてはならぬではないか  
それから王政維新の其時に世の中に妓を擁して天下の事を語る杯と云ふゝとが大きに流行してイヤもう亂暴狼藉、其事實に残つて居るのを見るが宜い、今の貴顯紳士とか何とか云ふ人達の那のれ内儀さんの系圖を糺して見るが宜い何處から來て居るか、私は一々其名を指すと云ふゝとはしませぬが大概搜したらチキ分るであらう、あれでも大抵趣が知れて居るではないか、古き言葉に上の好む所、下之に従ふと云ふソコで國家の長老の爲る所は後進生ゝれに習ふと云ふのは固より當然な話で、既に爾云ふ例が見せてあるから後進の者が或は藝者を請出して内儀にした遊女を身上して奥様にしたと云ふやうな事は耻の中の部分に這入らんで當然の話だ、ソレ所ではない、そんな亂暴不行狀をす

れば男子の働エライなと却て誇ると云ふ程の次第である今外國に醜業婦の出るのは國の耻だと云ふて嚴しく之を差止め開港場から船の出る時などには中々喧しい様子であるが抑も醜業とは金錢の爲めに淫を賣ると云ふふとであらうが斯る婦人を醜業婦と云へば今日唯外國に出稼ぎする者ばかりでなく日本國內の立派な處に澤山稼いで居るではないか光り輝く東京の眞中の立派な席に其醜業婦が居るではないか此一段に至ては如何しても日本人が外國人に對して何としてもどうも申譯のない話で、何と攻撃されても答辯に一句の言葉がなからう其癖是れは日本の不外聞、其れは西洋人が見て居るからなると云ふやうな事を鹿爪らしく論じて居るが足元から鳥が立つ自分達が自國に居て青天白日、見るに見られぬ醜體を人に見せ世界中の人に披露してソレで耻かしくないか誠に勘定の合はぬ話だ

さうして其男女交際法に於て男子が婦人を奨励して或は紳士達の集會の席にも婦人が出て行くが宜しい西洋の婦人が來るから日本の婦人も行くが宜しい西洋の婦人がバタを嘗めるから日本の婦人もバタを嘗めるが宜しい牛もたべるが宜しいとか何とか云ふ話は幾らもあるが扱て其出た時の體裁はさうだ例へば茲に宴會を開いて西洋人の歴々方が夫婦連で幾らも行て來る、日本の歴々も夫人同道ですつと出掛けて來る出掛けて來た所で茲に席定つて膳が出る、爾うすると何うも眼の眩む程藝者が出て來るイヤ藝者ではない眞實正銘の醜業婦が出て來てそれから酒が始まる段々酔て來る酔て來れば謠ひもすれば舞ひもする其中に主人氣取りの日本の紳士達は面白くて堪らぬ其藝者の中には豫て懇意な奴があつて昨日も何處とやらで逢ふて夫れから何とやら云ふ様な事で面白くて堪らない、ソコで以て其出て居る

れ内儀さん達——紳士の夫人達が其時に如何云ふ氣がして居るだらうかと思ふに茲に又妙な事がある誠に其れ内儀さんが平氣の平左工門と云ふ話か得意になつて居る其主人が何かタチャ〜藝者と戯れて居る様はない最う側から見ても汗の出るやうな様である夫れを内儀さんが見て居ながら瀉蛙々々として面白がつて居るとは如何も氣が知れない能く〜搜して見たら内儀さんと云ふものも昔年曾て例の場所を踏だ例の苦勞人ではないかと聊か嫌疑の念が起る左もなければアンナ馬鹿げた途方もない事があられやう譯はない實際斯云ふ事があるイヤとせ此間私と云ふ家の主人と一緒に何處に行た所が主人の馴染の藝者が出て來て笑止くて堪らぬ如何してアンナ女が馴染であらうかふんな笑止しい事はないとハア〜云つて笑つて居ると云のは是れは所謂江戸ツ子のヤキモチを焼かんで洒落と

云ふ所だか知らないが爾云ふ面白い婦人がある又或は其夫人に随分喧しい人があつて其主人から見ると爛ツたいと云ふやうな者がある爾すると或は其夫人に歌道を稽古させるが宜い茶の湯をさせるが宜い花を活けさせるが宜い鳴物を稽古させるが宜い、ずんど飛離れて一方は澤山旅費を授けて女中に供をさせてゆる〜湯治などへ遣るが宜い爾うすると其方に身が入て自然に家の事を忘れて主人公の醜體に就ても餘り喧しく云はぬやうになるなど、自分の内儀さんに對して孫呉の兵法秘密の計略を運らす者が世の中に在るそうだみんな浮世の有様でマア申せば人間私徳の破廉耻、獸行全盛の社會であるから女子教育などの話は二の次にして兎にも角にも大本の多妻法を止めにするの工風が肝要であらうと私は思ひます  
 又私は今の世の中の交際、社界の男子に向て忠告したい事がある、と云

ふのは集會である集會と云ふものが何の爲めだか知らない酒を飲  
なければ用談は出来ないものと見える、毎日一席必ずとある話でな  
い一日に二席も三席も一寸此方の席を務めて又其次に行かなくては  
ならぬ寺の住職が二軒の葬式を一日に勤めると同じ事だ集りさへす  
れば例の如く酒を飲むも飲めない又席を變へて飲むと斯うして居  
れば如何したつてどうも氣の毒な事だ、アレちやどうも體が續かぬ是  
れも眼に見えて居る、如何しても人間の生理と云ふものは欺くゝは  
出来ぬ如何したつて煩はずに居られないソコデいろゝ若い時か  
ら艱難辛苦もしたらうヤツと地位が出来た役人なら官爵が高くなつ  
て睨が利くやうになつた商人なら財産が殖えて肩身が廣くなつた功  
成り名遂げた大きな屋敷も買たらう大きな普請もしたらう所で其普  
請が出来て書畫骨董も集つた何に不足はない夫れから内には妾が居

るだらう外にも外妾があるだらう誠に愉快極まる、是れがマア大抵自  
分の本望を達した所だらうが其本望を達したのは宜いが自分の身體  
は何處に在るか自分で自分の身體を搜して自分で能く眺めて見るが  
善からう三十過ぎて四十前後になると、そろゝ老人風になつて若い  
時の元氣を無くして何時もむつかしい顔ばかりして居るのは何れ何  
處かに人に云はれぬ痛所でも出来たであらう年は四十の分別盛りか  
苦痛盛りか譯けが分らぬ又或は是れは見事に丈夫な男だと思ふて能  
くゝ見れば實は丈夫でも何でも無い唯むやみに肥滿するばかりで  
去年拵へた洋服は窮屈で着られぬと云ひ坂道には呼吸が切れて高い  
階子段の昇降には閉口と云ふやうな話は毎度の事だ是れが人生の本  
來に於て善い事か悪い事か若い時には多少學問もして是れ位の生理  
は分る筈ではないか凡そ人間が四十近くなると滋養は次第々々に少

なくなる可き筈である所が滋養は倒まに——逆に段々長くなつて來  
 る其滋養の良くなるも云ふ其反對に身體を動かすと云ふとが丁度又  
 少なくなつて居る元の仕入れと遣拂ひと不平均であれば如何しても  
 是れは肥滿せず居られない話である夫れでも瘠せてると云へば深  
 い處に病根のある徴だ瘠せても肥えても不養生をしながら無病息災  
 であらうと云ふのは火を撮まんで火傷をせぬやうにと祈るやうなも  
 のだ所が不養生で即死したと云ふ話もないから無學な奴等は人身の  
 生理を知らぬが佛でうか／＼して居るだらうが満足に壽命を長くす  
 るとは出來ない銘々持前の定命の内から何割か割引して往生しなけ  
 りやならぬ誠に憐む可き可愛さうな動物だ折角若い時から辛苦して  
 ヤツと大願成就したと云ふ其成就した大願と云ふものを打遣つて置  
 て死で仕舞なければならぬソコで死だ後を見るが宜い子供が大勢あ

るだらう其子供と云ふものが色違だ即ち腹違で兄弟相互に利害を異  
 にして居る元來腹違と云ふ其腹たる母親と母親との間柄は如何な者  
 であるか考へて見るが宜い其奴等が本妻に對しては矢づ曖昧に近  
 い主従とでも云ふであらうが其従者相互の間は姉妹とでもなし親類で  
 もなし相弟子とでもなければ同行信者とも云はれず先づ家に飼てある  
 一羽の牡鶏に二三羽の牝鶏が附て居る其牝鶏と牝鶏とのやうなもの  
 だから何とも其間柄の關係に名の付けやうがない兎に角に交際は至  
 極近い様で其實は甚だ遠いのみか内實の正味は敵同士に違ひはない  
 此睨合ひの敵同士も無鐵砲な主人が生きて居る間は主人の御威光御金  
 の光で、どうやらからやら表面ばかり取繕ふて居るけれども相互の内  
 心は知れ切つた事だソコで以て其母親の産んだ子は自分のほんどう  
 の子だから不斷内證の事も話して聞かせる中に敵同士の相手の母親

のを悪く云ふは勿論その敵の産んだ子の事も善くは言はない、いよつとしたら自分の不平な時には親仁の事も悪く云て聞かせるだらうソコデ今女子教育論者とか何とか云ふ人達の鸚鵡石——母たる者の言行能く其所生兒を感化すと云ふのが本當ならば腹達の子供は誠にイヤハヤ十分に母親に感化せられて兄弟喧嘩の修業は見事に出て何時でも差支のないやうに卒業した者であらう昔の大名などの家を見るが宜い兄弟姉妹眞實睦しい者は百に一も珍らしいではないかマダ其上に二代目の子供の目から見ると親仁の行ふた事は随分悪くないもので大概の事は能く見える、能く見えぬでも悪くは見えない、ソコで親が生涯不身持な事を遣て居たと云ふとがどうも小供の眼から見るとそれは左迄の罪でない悪い事ではないと斯う思ふて親の家督も相續すれば親の不品行も相續して又も相替らず親と同じ事をする、

夫れから又もや家の不始末が始まり枝から枝がさいて遂に兄弟不和とならねばならぬ、さうして見れば初代の人折角造出した家も財産も子孫安全の爲めではなくて唯喧嘩の種子にみそなるだらう後世子孫の爲めに乃公も財産を造つて立派な家を築して遣らなければならぬと云ふのは後世子孫の爲めに喧嘩の種子を蒔た畑を渡すと云ふものとになりはせぬか少し考へて見るが宜からう西洋は一夫一妻日本は一夫多妻と斯云ふソコで之を文字の如くちやんと遣ると云ふものが果して急に事實に行はれるみとか行はれぬものと加凡を物事と云ふものは遠くから見ると誠に最易く見えるもので富士山でも遠方から見ると誠に滑かな山で蘆滑りでも出来さうに奇麗に見えるが行って見ると近寄れば近寄る程岩窟でゴチャンとして居る人間世界も亦然り遠くから見ると誠に最易いが扱實際に近づけば

近づく程物が難くなる今西洋は一夫一婦である日本のみ一夫多妻であるがナアニ忽ちにして西洋と同じやうになるものと思ふのは是れは間違ひでなか／＼爾う行くものでない加之ならず西洋でも一夫一婦と云ひながら其實を穿て見るとなか／＼爾うでない時としてはマア途方もない事もある様子だけれども唯外から見た所が奇麗だ都て隠してある途方もなく隠してある其隠方が容易な隠方ではない實にどうもソレは大秘密と云ふ其中の極秘密で分らない事になつて居る又よしや分つてもソレ程に秘してあるからソレを却て彼此と喧しく云ふ者の方が野暮に聞えて風が悪いと云ふやうな事で兎にも角にも上向きは誠に奇麗になつて居るソコで日本の一夫多妻と云ふものは今より百千年の後世學者の常に云ふゴールデンエージと云ふ時になつたらば本當に一夫一婦になるか知れぬけれどもソレを只今遣らう

と云ふのは無理な注文行はれるものでない行はれるものでないから私の第一番の願は先づ隠して呉れろ秘して知れないやうにして呉れろソレが第一番の手始めで之を喻へば大酒飲み——酒飲みがどうも酒が飲みたくて堪らない毎日酒を飲むと云ふ習慣を成して居ると云ふ其者に今日から酒を罷めろと云ても罷められるものでない酒は毒だと云ひながら其毒を頼に罷めたが爲めに煩ひ出す事があるからソコデいよ／＼之を罷めやうと一心發起したならば先づ集會の席では飲まない又自分の家の内でも人の居る所では飲まないとして夜分寝る時に人の知らぬ間にグイと飲む其飲むときにも是れは飲んで済まないどうも自分の身體の爲めに悪い如何にも怖いもの恐ろしいものだと斯う思つて飲みながら始め五合のものから四合にして見やうと二合減す又暫くして三合イヤ仕舞には茶碗一杯にする到頭禁酒の出

來るゝとがあるソレと同じ事であるから今の日本の多妻法を罷めにするに云ふゝとも此禁酒のやうな鹽梅式にして始めは先づ之を隠して自分は實に悪い事をして居ると心の中で赤面しながら罷やうと心掛けて勉強すれば到頭仕舞にはソレが止むやうな事になる私は決して無理な事は云はぬ遠方から眺めて直ぐ之を止めて仕舞へ杯と云ふそんな野暮も何も云ひはしないからどうか秘密にして貰ひたい、何分にも今の有様で男子ばかりが斯云ふやうに暴れ廻て居ては婦人の居處がない勝手な事を男子がして居ては本當の眞面目な婦人の居處がないぢやないか婦人が子を生む生んでも主人は忙しいからと云て其子の事に就て一寸とも眼を掛けるゝとが出来ない子供の養育はれツ母さんが獨りの責任でマダ夫れ所の話ではない酷い奴は家内が病氣でもろくに看病もせず他人に打任せて自分は何かの用事を口

實にして出て行くやうな次第であるからたまゝ人に内君の病氣の容體を尋ねられても事ゝまかに述べるゝとが出来ない夫婦有別他人の如しとはゝんなゝとを教へたものではない亂暴者が手前勝手に解したのだらう聖人の教も飛んだ所に利めがあるから氣の毒だ、マダ夫れ所ではない是れがアベコベに主人の煩ふた時ゝそ大變だ不斷ピシゝして居るときには他人の如くなりし其夫人が俄に調法になつて來て何もかも夫人任せ看病一切夫人の持切りで藥を飲むにも食事をするにも他人の手では氣が濟まぬと云て内君は晝夜枕邊を離れるゝとが出来ぬ然かも其主人の病の原因を尋ねて見れば例の交際社會で飲過ぎ喰過ぎ美花の徹夜待合の夜更しから起つたゝとだと醫者の診斷にはぢやんと極つてある耻知らずとも義理知らずとも名の付けやうはない私の若い時に知てる書生があつた名は云はれないが言語道

斷不身持な男で散々亂暴の末、内君を迎へたは宜かつたが其後も相替  
 らずの無茶苦茶で遂に病氣になつて内君の長い看病で全快した其病  
 氣は酷い梅毒だ、所が亭主の梅毒は全快した後で其毒を引受けた内君  
 あそ氣の毒ではないか立派な家の娘が道樂者の梅毒に感じて二年も  
 三年も苦しみ顔は瘡せ衰へて青くなり聲は涸れる頭の髪は抜ける夫  
 れはく恐ろしい有様であつたが其後如何したやら死んで仕舞たか  
 マダ生きて居るか其書生は老翁になつて今もちやんと宜い顔をして  
 東京に居る様子だ何と無慘な話ではないか畢竟その本を尋れば一夫  
 多妻法の然らしむる所と云ふより外に結論はあるまい私が先年時事  
 新報に婦人論、男子論又男女交際論など書て出版したあとがあるがア  
 レなどを些と讀で貰ひたいものだ交際社會の男子が讀で自から慎し  
 むは勿論、婦人達もイヤに古風を氣取つて三十一文字を弄んだり又は

儒者風の先生から女大學同様の講釋を聞いたり演説を聞いたりして  
 親に孝行所天に貞節の主義を學ぶは甚だ宜しいけれども其孝行貞節  
 の足元から鳥が立て一切萬事、目的が外れるではないか今の天下の父  
 たる者天下の所天たる者は如何なる身持して如何なる破廉耻を犯し  
 て居るか先づ第一番に其方に眼を着けて兎にも角にも西洋文明流の  
 學問をして女性全體の權力を回復するの工風を大切ではないか其  
 工風の大本は多妻法を打破る事だ夫れで私が是れまで動もすれば男  
 子の無法亂暴だと云ふを説く爾うすると之を聞く者が其時に返す  
 言葉はない黙つて困つた顔をして居ながら陰に廻つては「福澤が  
 あんな喧しい事を云ても逆も行はれない」と云ふ様子だけれども私は  
 少しも落膽しない抑も行はれないとは何を云ふのか多勢に無勢天下  
 一般無数の男子皆さうであるからあんなシテ六かしい事を云ても行

はれぬと云ふのであらうが其行はれぬと云ふのは天下一般の中の一  
 部分ではないか手前達の仲間が亂暴狼藉をして居て之を止めるふと  
 は天下一般だから行はれないと思ふのか何の事だ少しも分らない  
 いや酒を飲むが悪いと思へば自分から止めるが宜いソレはせず  
 に只世の中がと云ふのは手前が即ち其世の中の一人ぢやないか  
 そんな事で誰が聞く者があるか決して承知の出来ない事である傳染  
 病流行のときに攝生法はシチ六かしの事であらうが近處の人が不養  
 生ばかりする逆も醫者の言ふふとは行はれない序ながら自分も一處  
 になつて不養生を犯すと云ふか假初にも醫者の説を聞いて毒物の毒た  
 る道理が胸に落ちて返す言葉もなく其道理を尤もだど合點したらば  
 其者一人でも宜し即刻より謹で養生をするふそ人間の本分だ御多分  
 に洩れぬも事に寄る多妻法の禽獸世界を脱けて一夫一婦の人間界に

還るは人獸分け目の堺だ御多分に從て禽獸の方に附きますと云ふ馬  
 鹿者もなからう私は構ふとはない生涯有らん限りミシク遣付けて  
 遣る夫れに返す言葉があるなら反駁して見ろ日本國中の者を相手に  
 して私が獨りで返答してはね飛ばして見せやう  
 國を開くならば根をそぎ開いて何も角も西洋流にしなければならぬ  
 と云ふのは私が豫て云ふ議論だソコで兎にも角にも一度國を開いて  
 さうして西洋と日本と比べて見て其中に或は一利一害一短一長西洋  
 流義とて決して爲めになる事ばかりぢやなからう之に伴ふ弊害と云  
 ふものはあるに違ひない違ひないけれども茲に明白に利害長短の分  
 つて居ると云ふふとでは是れが日本の短處である是れが日本の彼に及  
 ばぬ所であると云ふふとが明白に分つたならば一寸どの猶豫もなく  
 すぐに換へなくてはならぬぢやないかソコで此前にも言ふ通り其利

害長短の明々白々争ふべからざるものであると云ふものは日本の一  
 夫多妻の習慣だ、此位にモウ既に分つて居れば之を打毀して了ふと云  
 ふのに何も猶豫するみとはないぢやないか或は是れは多年來の習慣  
 である今日どうも及ぶ可らざる事だ容易に之を改むると云ふみとは  
 六かしいと斯云ふが其言ふ人が即ち習慣中の其人ではないか他人に  
 恥はす先づ自から改むるが宜いぢやないか其利害の在る所を云へば  
 天理人道など云ふ議論は姑く擱き眼前外國人から輕蔑されると云ふ  
 耻辱だ日本人が裸體になつて往來する日本人が赤牒を出して路傍を  
 徘徊して居ると云へば是れはモウ醜體を現す事だから相濟まいと云  
 て居るではないか其丸裸體よりも赤牒よりも何とも云はれない醜體  
 と云ふものが此處にちやんとあるぢやないか夫れを見ながら之を改  
 むるみとが出来ないと云ふのは如何云ふ譯けだ先年亞米利加の故大

統領ゼチラルグランドと云ふ人が日本に來た時日本で有らん限り  
 の響應をした或時に東京芝居の新富座に連れて行て踊を其人に見物  
 させると斯云ふので夫れで如何するかと思つたら東京中の藝者を連  
 出して踊らせた事があるゼチラルグランドに日本語が分らず日本  
 の内幕の事情が能く通じて居なかつたあを幸だが若し事細かに日本  
 の事を噛分けて居て「アレは何だ」とわれは藝者だ「藝者と云ふものは  
 んな者だ——三味線と云ふものを弾く、人の酒を飲む時に其座中の周  
 旋をする女で兼て醜業を營む極く賤しい奴だ錢さへ遣れば身を賣る  
 奴だ西洋の言葉でプロスチチュートであると云ふみとを其時にグラ  
 ンドに話して聞かせて其人の腹に落ちたらば踊興ばで彼處の場所を  
 去つた筈だ知らぬが佛でグランドが宜い氣になつて見物して居たあ  
 を實は氣の毒な譯けだ

私は先年和蘭に行て居たふとがある三四十年前だ其時に和蘭のハーゲと云ふ都にドクトルヘンデレツキと云ふ人があつた其人は富豪であつて醫者を業として居る自分の家には私有の博物館を持て居て種々様々の物を集めて居ると云ふ位ななか／＼エライれ醫者様であつた所が如何しても交際が狭い何としても付合人が寡ない金は持て居て醫者も上手であつて何も斯も立派に出来て居るけれども交際社會に顔を出すふとが出来ぬ夫れから私は他の蘭人に話して私は昨日ドクトルの家に行た所がドクトルは今日も私方に来て何をを見せて呉れの何のと親しく話をしたと云たら其蘭人は妙な顔をして彼れが来たか」と云たばかりで何ぜあんな者に遇つたかと云はぬばかりの様子だから夫れから私が聞き返して「兎角人があの人を重んじないやうにあるが一體如何云ふ譯けか」と云たら「イヤあれはなか／＼技術はエラ

い物も能く分る奴だが彼奴はどうも仕様のない奴であの内儀さんと云ふものは素と賣煙婦だあれはモウ生涯世の中に顔を出すふとが出来ないソコで適々君達が日本から来たものだから幸に人並の交際しやうと思つて無闇に此旅館に来るのだと云ふたふとがある夫れから又私は聞いた事がある亞米利加在留の英國か獨逸のミニストルがワシントンに来たふとは来たが亞米利加では如何しても之を公使として待遇しない段々聞いて見ると其内儀さんの出處が間違つて居る變な婦人であるので其一點で如何しても公使が勤まらずに亞米利加から歸つた人がある其嚴重な事と云ふものは何とも云はれない途方もない嚴重だソコで外國人が日本に来て居て其位な嚴重な社會に養成せられて居ながら日本社會に行はるゝ有らん限りの醜體を見て平氣で居ると云ふのは是れは必竟仕方のないものだと始めから

タカを括つてそんな事を論ずるのが野暮だ高の知れた日本人だから  
 當然だ丁度諭へて申せば折助が眞裸體で箕踞をかいて物を喰つても  
 彼は折助だから爲る筈だ、と云て折助雲助が厭だと云へば道中が出來  
 めから仕方なしに彼奴らは其筈だと云ふ位に輕蔑されて居るに違ひ  
 ないソレでも耻しくはないか

さう云ふ六かしい事を云ても夫れは言ふべくして行ふべからざる事  
 だと斯云ふ人があるであらう、あるであらうけれども世の中の長者に  
 は夫れとなく自から手心もありさうなものだ例へば警察の取締で何  
 となく世間を烟ッたくする工風もあらう又は官吏の懲戒令を施すに  
 も當人平生の不身持を箇條の中に計へる仕方もあるやう又或は諸會社  
 とても同様な會社の風紀を紊るやうな人物は自然に之を遠ざけるや  
 うな事は出來ないと云ふ筈はない其出來ないは長上の人先き立て

悪い事をして男子の破廉耻不品行は當然だと云ふやうな風俗を成し  
 たからである其極度に至ては道德一偏の本山と云ふ本願寺の大和尚  
 が酒色に浮かれて醜聲外聞むかしなれば其和尚を捕へて江戸の日本  
 橋に晒らして嶋流しにする所を今は時勢の變遷そんな事は法律にな  
 いと云ふのか政府の筋から何の沙汰もなく却て内地雜居も近づい  
 たが眞宗は如何する覺悟ぢやなんて尋ねたと云ふ今の彼の本願寺に  
 道德宗教などの話は方角違ひだ何は扱置き坊主の不身持を改めさせ  
 るが第一番の急要だらう畢竟坊主までがみんな淺ましい有様に墮落  
 したと云ふのは坊主ばかりの罪でない社會一般の風俗で本願寺の大  
 和尚も其惡風俗に酩酊したる者と云はなければならぬ誠に頼み少な  
 い世の中とは申しながら苟も國を憂ふる心ある者が自から奮發して  
 自身の非を改ると共に他の手本になるときは左までの大困難事では

ない本々人の力を以て破つた風俗だから又人の力を以て之を回復するふとが出来る筈だ

ソコで何でも此事に就て心付いた人があれば其心付いた其日から先づ其一人が前日の非を改めるが宜しい改めたらばソレ切り何の事はない桃の臺に梅の樹を接だやうなもので昨日までは桃の樹でも今日は梅の樹になる先づ夫れを遣るが宜しい或は又英雄色を好むと云ひ心身屈強な者は必ず色に溺れると斯う云て妙な所に説を附ける者があるが私は丸で反對で如何しても色に溺れる者は弱い者だと思ふ眞實強い屈強な精神を持って居る者でなければ己に克つと云ふふとは出来ないふと思ふ色に溺るゝのは強さうにあつて本當は性質の弱いのだ血氣な人が品行を慎むと云ふふとは随分困難な事である其困難に耐忍ふと云ふふとは百萬の敵にも恐れないと云ふ程の勇氣がなければ出来ないと決して愚圖々々した者の出来る事ではない活潑磊落眼中人なしと云ふ位の大勇氣がなければ夫れは出来ない昔時の英雄が内行に就て云々との話もあらうが是れは我國不文の時代で醜の醜たるを知らざりしが故である云はゞ其人の無智なりしが故である今日の文明多事の世の中に居て僅に品行を慎む位の事が自力に及ばずなと云ふ事は決して許されない自身の恥を知り自國の名譽を重んずる心あらば篤と考へて見るが宜からう

宴會集會の法を變へたいものであると云ふのは凡そ人の考は何か物を見るに其物に伴ふ事を思出すの約束で例へば巨燧を見ると寒い思ひをする吹上の水を見ると夏を思出すと云ふやうな譯けで物が其處にあるとツヒ之に誘はれて色々な事を思出すものであるソコでむかし江戸で浮氣な紳士風に世の中を渡た人は諸藩の留主居役で夫れは

専ら交際一方で角力も見れば芝居も見入る出入の藝者もあれば得意の待合茶屋もあると云ふやうな事で只有らん限りの事をして其交際を勤めたものである又大阪でも諸藩の倉屋敷の役人達が大阪の豪商に交つて何時でも金談——金を借出すとか返済するとか云ふ話をする中々六かしい其話には先づ寄合て酒を飲む只春宵一夜の酒を飲ではマダ親密に及ばぬソコデ茶屋に行く只の茶屋なればマダ宜いけれども多くは遊廊に行く倉屋敷と云ふものは大抵大阪の北の方に在つたもので北ノ新地に近い新地には青樓がある其處へ行て而して金の談判をする飲めや謠へやモウ大騒ぎをする其間に本當に酔ふ者もあれば酔つた真似をするものもあつて何うやら斯うやらソコで話を纏めると云ふよとは昔の風であつた所が今では留守居もなければ倉屋敷の人も世の中になくなつたけれども今の役人とか紳士とか云ふ人達

の交際は丁度昔しの留守居風で何か集會の時には是非とも盛に飲まねばならぬ先づ席を開いて而して膳が出る女が出て來る藝者が踊る夫れから様々いやな話になる是れは所謂杯盤に誘はれて醜體に陥ると云ふやうな次第で杯盤罪なし古來の醜風が之に着き纏ふて居るから何として今日本の酒宴法は根から止めにしたものだ其酒宴法も宜しくないが殊に馬鹿氣てるのは彼の送別とか留別とか云ふ集會の事だ朋友が遠方に行くとか云ふ遠方ならまだしもだが東京から大阪九州に旅行在勤すると云ふにも送別の騒ぎだ東京大阪の間に今の馬鹿氣たのろい汽車に乗ても一日路ぢやないか東京市中の高輪から下駄をはいて根岸に往來しても一日は掛る其根岸と同一大阪に人が行くからとて送別とは何の事だ畢竟浮氣者等が酒が飲みたい其飲む爲めの日實に送別など云ふ事を持出して騒ぐと云ふより外に辯

解はなからう

其送別集會などの爲めに浮氣者等が身體を苦しめるのも可笑しい旅行者の出立前は十日も二十日も引切りなしに案内を受けて毎日々々大抵同じものを飲食して同じ藝者を見て同じ話をらてガツカリして家に歸れば又明日も同じ事だと云ふ如何しても身體の續く譯けがない旅行と云へば政府の官員か諸會社の役人か何れ何か公用の爲めの旅行ならんが其旅行先きの役目の苦しさをよりも出立前の酒の方が苦しからう然かのみならず政府でも會社でも旅行を命ずれば何れ本人へ旅費は與へるであらうが大きに御苦勞出立前送別騒ぎの御苦勞に金を與へるやうなものだ今の日本國中の事業と云ふ事業は官民共に酒を飲む片手間に遣る事業だふんな事で何が出来るものか政府の役所でも諸會社の内でも人ばかりウシヤト群集して其割合に事の舉

らぬのは無理はない

何の集會でも何の相談會でも一切萬事みの通りで其不潔不養生亂暴滅茶苦茶の有様は古來の交際法に染込んだる悪習慣であるから何としても之を改革せねばならぬ先づ即案には今の茶屋風の飲めや騒へやの馬鹿騒ぎを止めにして西洋流儀にしたらば少しは改革の効能があらうかと思はれる元來飲食を目的にして集るのは下等社會の事である苟も中等以上文明の士人と云ふ者は夫れほゞに賤しい根性ではあるまい其集會相談會送別會なんど云て集まるのは喰ふ爲めに集まるのか集まる爲めに喰ふのか先づ其邊を考へて見るが宜からう多人數集つて時刻になれば空腹になるから物がほしくなる酒を好む人は酒を飲みたくなる即ち飲食物の必要を感ずる所以で爾う云ふ場合とあれば固より飲食を禁ずる譯けはない西洋流のテーブルで西洋料理

を飲食すれば給仕は無言で話をすることは客と客と誠に清淨潔白なれば男子ばかりでなく良家の婦人養育の高尙なる令嬢達でも席に連なる事が出来る何分にも今の所謂杯盤無茶苦茶の宴會に貴婦人令嬢が出席するのは卑陋ながら婦人にして遊廓惡所場に遊ぶやうなものだ誰れがそんな處に出る者があるか夫れも藝者が本當の藝者で唄ふか舞ふかなれば其藝人の男女に拘らず其藝ばかり見物して差したる故障もなからうけれども醜業婦ども何とも名の付けやうのない藝者共が公然立派な席に罷出て喋々嘯々男子は之に戯るると云ふそんな席に出られるものか浮かれ男も少く考へて見るが宜い西洋の婦人の有様を見れば如何にも得意な容子で先づ夫婦居れば主人の方が内儀さんの御機嫌を取て下流に居るやうに一寸見られる内實は如何だか知らない知らないけれども外から見た所では兎に角

に婦人を貴ぶと云ふとは事實に於て是れは間違もない話だがソレに引換へて日本の婦人位な哀むべき境界はないと思はれるソレは随分其婦人を可愛がらない人はない甚だ愛するが如く見られる見えるけれども其正味を云つたらば只一種の玩弄物とより云はれない外面は如何でも宜いとは云ひながらせうも私の氣に喰はぬ事がある第一番に男子が高く止つて居て其主人が内儀さんと呼棄にする輩がある今日でもあるぢやないか何の事だか譯けが分らない如何云ふ譯けで自分の内儀さんを呼棄にするか夫婦間の手紙往復の有様も大變に違ふではないか丸で君臣のやうに書いて居るのを折節見る可笑くつて堪らない之を外國人に見せたら如何だらう外國人に様とか殿とか云ふ日本の手紙の意味を能く分るやうに吞込して而して夫婦の間に取遣りした手紙を見せたい丸で耻の搔擧げだ此位な謂れの無い話

はない畢竟女は何にも出来ない着せるのも喰はせるのも皆男子の働  
 で苟も生殺與奪の權が男子に在て而して其婦人と云ふものはね情で  
 生きて居ると云ふやうな趣きに見えて居る人倫に於て相濟まぬと云  
 ても此位濟まぬ事はなからうであるから外面の體裁に於ても先づ言  
 語文章共に昔からの仕來りを此處で以てすらりと止めて仕舞なけれ  
 ばならぬ爾うすれば先づふれが眞實の同等の始りだ今の世間の洋學  
 者とか西洋流儀の紳士とか云ふ男に是式の事は分つて居る筈だと思  
 ひの外分らぬ連中が多いやうだ何の爲めに教育を受けたのか耻も法  
 も知らぬ學者だ

所が其同等でありながら人間が此世の中に生きて居るのは苦樂相半  
 ばしなればならぬ筈のものだソコで今男女相並べて置いて日本の社  
 會に於て何方の方に苦が多くて何方の方に樂が多いかと云ふふとを

試に見たらば男子は先づ外に出る颯々ど外に出て颯々ど人に交際ふ  
 ソレは交際ふ必要もあるだらう必要もあるだらうけれども必要以外  
 何でもないと云ふとに色々な樂があるではないか先づ藝者を聘るな  
 んど云ふ道樂は暫く措いて馬に乗る者もあり車に乗る者もあり自轉  
 車に乗る者もあり散歩する者もあり花見船遊山に行く者もあり朋友  
 相會して面白さうに遊ぶ者もあらう或は今日も何處から呼れた明日  
 は何處から案内が來た所謂交際男子と云ふものは寧日なし虚日なし  
 に交際をして居る中に眞實の必要と云ふものは幾日あるか先づ之を  
 推察するに一年三百六十日虚日なしに交際して居る其中の少なくも  
 三分の二は面白い事を遣て居るとより外見られない何か自分の役所  
 に出るだらう會社に出勤するだらう歸りが遅くなつた果して會社の  
 用で遅くなつて居るか退後に一寸飲まうなんと云ふ爲めに忙しいの

ではないか其遅いのには律義なれ内儀さんは家に留守番をして居て何とも言ふて寄越さぬから良人では歸りが遅いと云て食事もせず待て居るなんと云ふよとは随分あるものだ極善い者で電話で一寸と爾う云て寄越すか然らざれば打擲り放しで翌朝になつて昨夕は如何云ふ譯けで遅かつたかと云ふと返辭は「フォーム」と云たきりだ然るに内儀さんが花見遊山なと云ふと別段の特許を得たやうな譯けで最う長い間に一度芝居を見たけで長い間恩に被せて居ると云ふやうな事が今の事實にあるではないか割にも勘定にも合つた話ぢやないンコで時としては彼處の内儀さんは酒蛙付だせうも我儘勝手な事をして居ると云ふ評判の内儀さんがある、それは少氣力があつて利かぬと云ふ女は遣りさうな事だ無理はない無理はないがソレを遣ると云ふと世間の評判になつて仕舞ふ彼處の内儀さんは酒蛙付だ男子の十分

一の運動をするも百倍の評判になつて仕舞ふ其評判は誰がするかと云ふと男子が寄て其評をして居る誠に人の秘密に立入るやうであるが今妾を持て居るものは世間に打擲る程ある試にれ内儀さんが男性の妾を置いたら如何だらう貴賤上下の別なく即刻離縁と來るだらう所が是まで女が妾を置いたと云ふ話は聞いた事はない、けれども其婦人の不平と云ふものはソレは先祖代々遺傳の性質とは云ひながら婦人も同じ普通の人間で男子と少しも變る所はありはせぬ自分自から忍んで居ても如何しても其不平と云ふものは變むなくては居られな

い譯けだ其段々に鬱した不平の發するところが毎度あるではないか其甚だしき極點になれば自殺するなと云ふものがあるぢやないか其時には良人は何と云ふか以後を償むと云ふのだらう本當を謂へば腹を切て死ななければならぬ筈だ申譯けはありやしない

斯云ふ譯けであるから女は段々小さくなつて隅に引込なければならぬ引込めば引込む程交際と云ふものは先づ内場になつて始終籠の中に這入て居るやうになるソレゆゑヒヨイと廣い處に出て人間世界の空氣にパツと當る即ち大きな集會の席とか何とか云ふ處に引張出されるも如何しても不斷沈黙して居るから俄に其處で以てワツと陽氣にならうと云てもなり得られないで兎角後透りをするやうになると云ふもとは是れも止を得ぬ譯けたソレを男子は目して交際に慣れない女は仕様のないものちやと斯云ふ夫れが口實になつてソコで藝者が聘らなければ夜が明けない客は出來ないと斯云ふもどになる夫れからして藝者騒ぎと云ふもどが世の中に盛に起るのだけれども一ツ思直して見れば立派な婦人が世の中にあるではないか共に朋友となつて親しく交はらうとばかりに心掛けて遣ればア、云ふ汚ない醜業

婦に交際はぬでも世の中は渡れる筈である私の書いた男女交際論か婦人論か今記憶せぬが男女の交と云ふものに肉交と情交と二つある所が日本の今の風俗と云ふものは男女相交はると直にソレに従つて生ずる弊は肉交に重きを置くやうだ自から習慣の然しむる所とは云ひながらそんな情ない淺ましい事を考へないでも立派に悠々と交際の餘地がちやんとあつて双方とも賑かに快く此世の中が渡れると云ふもどをせず居て大事な人間平常伶俐な人間が到頭仕舞には畜生の眞似をしなければならぬとは何事だ自分の家で大厦高樓とは云ひながら其實は豚小屋と同じ事だ其様な厚かましい耻かしい有様に陥ると云ふのは氣の毒な譯けではないか少し考へて見るが宜い



# 本社

東京市京橋區南鍋町二丁目十二番地  
(電話)編輯用本局一四九番事務用本局三二七番

新報見本は御申  
越次第進呈す

## 時事新報

は世界最新東洋無類の完成輪轉大器械を以て印刷する毎號十二面乃至十六面の日本一の新聞紙なり

## 時事新報

の議論は適實公平にして着眼高く、雜報は百事を網羅して一方に偏せず精確迅速なるを世既に定評あり

## 時事新報

の株式、米穀、生絲、製茶を始め一般商況物價に關する報道の機敏確實なるは商業専門の新聞も及ぶ所にあらず

## 日本

## 一の

# 時事新報

定價 (前金)

一箇月 五十四錢  
三箇月 壹圓四十五錢  
六箇月 貳圓八十五錢

郵送の分  
郵税一箇月十三錢

## 時事新報

には倫敦ロイテル特電あり世界の大事を速報す其他各地の電報林の如く内外の通信山を成し四方の事情一目の下に明なり

## 時事新報

には奇警なる小説あり優美なる繪畫あり又世間日々の珍事をも漏さず婦人小兒にも分り易く面白きものと限りなし

## 時事新報

は發行紙數最も多く且つ社會に信用勢力あるを以て廣告の有効なるものと全國新聞中肩を比ぶるものなし

## 出張所

大阪市堂島濱通二丁目十番屋敷(電話)四九二番  
横濱市相生町六丁目九十五番地(電話)四三三番

全国各地に  
賣捌店あり

## 七版

# 福翁百話

全一冊紙數凡四百頁

正 上製 一圓

並製 二拾五錢

(郵税十錢)  
(郵税六錢)

上製 用紙舶來上等紙 背皮金字入美本  
福澤先生肖像 (卅五年前と最近の分) 二葉入

上製並製も福澤先生自題詩 (寸横六寸) 寫眞石版入

本書は福澤先生が多年心を籠めし著述にして宇宙の妙理より居家處世の心得に至るまで説去り説來りて餘蘊なく文章は先生獨得の平易明快一讀再讀多々益す

妙味を覺ゆ初版以來既に拾餘萬部を賣盡し今回第七版を發行す何人も必ず一讀すべき良書なり

## 發行所

東京京橋區南鍋町(電話)編輯用本局一四九  
二丁目十一番地(電話)事務用本局三二七

時事新報社

## 大賣捌

大阪北區堂嶋濱通(電話)四九二  
一丁目四十番屋敷

同 出張所

●全国各地時事新報賣捌所及書林にあり

# 福澤全集緒言

全一册 正價貳拾錢 郵稅貳錢

本書は今度福澤全集を刊行するに付福澤先生が新に筆を採りて起草したるもの係り先生が今を去る廿九年前即ち万延元年以來幾多の著譯を爲したる其著譯書の由來及當時の時勢事情等をも説明したるものにして趣味津津々讀んで倦むを知らず名は福澤全集の緒言なりと雖も實は新日本文明の活歴史なり讀者の便利を圖り特に一冊子と爲して發行す

## 發行所

電話(編輯用本局一四九番) 電話(事務用本局三二七番)

東京京橋區南鍋町二丁目十二番地  
時事新報社

## 大賣捌

電話(四九二番)

●全國各地時事新報賣捌所及書林にあり

同出張所

福

51-1

著作